

ワークショップの枠組み

目的

2050年脱炭素社会の実現に向けて、若い世代が、ワークショップを通じて、気候変動問題・脱炭素について理解を深め、当事者としての意識・関心を持って脱炭素社会づくりのための行動や分野間の協働に取り組んでいくことを目指す。

日時・会場

第1回：9月1日 10:00～17:00
第2回：9月15日 13:30～17:00
かながわ県民センター2階ホール（横浜駅）

実施体制

主催：神奈川県
協力：かながわ脱炭素推進会議

ワークショップの特徴

- ・脱炭素化の担い手である若年層を対象とした、県主催初の参加型ワークショップ。
- ・若者の将来の連携・協働、事業を進める際の多様なアクターの存在を体験できるよう、企業、行政、大学、研究機関、NPO・市民活動など多様な立場の若者を対象とした。
- ・講演だけでなく、グループ討論、グループワークを取り入れ、当事者・地域の視座で課題に対峙する体験。
- ・個人の意識・行動変容にとどまらず、脱炭素の取組みの事業化・各組織・セクター間の協働を議論の焦点に。
- ・参加者の交流、ネットワーク作りを支援。

参加者概要

募集条件

参加者の条件は18歳から39歳までの神奈川県内に在住・在勤・在学し、原則2日とも参加できる者とした。

参加者内訳【9/1 33名、9/15 21名、両日参加 20名】



平均年齢 28.6歳

分野別



エネルギー関連会社、金融機関、メーカー、サービス産業等

神奈川県庁、平塚市、茅ヶ崎市、海老名市、南足柄市、葉山町、開成町

横浜国大、東京都市大、昭和女子大、国土館大、東京農大

ゼロエミッションを実現する会等

IGES

ワークショップの進行プログラム DAY_1

スケジュール

詳細（講師 / 担当者）

10:00

主催者挨拶

オリエンテーション・ウォーミングアップ

柏木剛（神奈川県環境農政局脱炭素戦略本部室長）

村上千里（ファシリテーター）

10:15

基調講演

「脱炭素社会に向けてどうチャレンジするか」

杉山範子

（東海学園大学教授、世界首長誓約 / 日本事務局長）

トートナウ市（ドイツ）、トリノ市（イタリア）、豊橋市、上士幌町等の国内外の脱炭素への多様な挑戦を紹介

11:00

企業・地域での脱炭素（協働）アクションの先行事例・課題の報告（第1部）

事例紹介①

「EVシェアの活用等による公民連携のまちづくり」

内田由美（小田原市ゼロカーボン推進課）

環境・エネルギー政策を最重点に掲げる小田原市の再エネ導入、蓄電池・EVの導入拡大を連動させた方策、その公民連携の推進等

事例紹介②

「Fujisawa サステイナブル・スマートタウン～テクノロジーを活用した地域コミュニティ活性化と社会課題解決～」

佐藤里咲

（パナソニック オペレーショナルエクセレンス(株)）

2014年にまちびらき。環境・エネルギー・安心安全の3目標掲げ、多事業主体・行政・住民との連携により様々な課題に挑戦して日々進化し続けていることを報告。

グループで事例紹介①②の感想共有後、全体で質疑応答

12:30

休憩

13:30

企業・地域での脱炭素（協働）アクションの先行事例・課題の報告（第2部）

事例紹介③

「MaaSの取組みについて」

小林弘和（京浜急行電鉄(株)新しい価値共創室）

京急沿線各地を「住 / 働 / 楽」がそろう生活圏として中核拠点構築を目指す（COCOONプロジェクト）。その中核の一つがMaaS基盤の整備

事例紹介④

「フードバンク活動を通じた食品ロス削減の取組みについて」

藤田誠（(公社)フードバンクかながわ）

県で年間21.1万トン発生する食品ロスの削減に向けて、産官学の協働の取組みを推進。その中核が家庭の協力を得て行うフードドライブ。

グループで事例紹介③④の感想共有後、全体で質疑応答

15:00

グループワーク

「協働で進めたい脱炭素アクションをつくろう」

01 グループづくりとテーマの決定

15:20 休憩

15:30

グループワーク

02 望ましい未来像を描く

03 現状の整理

04 プロジェクトのアイデアを出す

05 途中経過の共有

第1回終了後

第2回に向けての準備



グループワーク



アイデア

1日目の結果をふまえ、主催者の専門家グループが、次回に向けたアドバイスを取りまとめ、各グループに事前に送付し、準備を促した。

ワークショップの進行プログラム DAY_2

DAY 2

13:30

グループワーク

06 アイデアの具現化とスライド作成

15:15 休憩

15:30

各グループの発表
意見交換、交流

16:40

クロージング



スライド



発表



参加者

各グループの発表・提案

グループ1

THEME

アグリシェアリング ～農地を中心としたシェアリングを通じた循環型地域社会の形成～

MEMBER

自治体職員 5 名、企業社員 2 名、研究機関 1 名

01

2050 年のあるべき姿と課題

「農業」を中心に「人(スキル)」、「資源」、「脱炭素」の 3 つからなる循環型地域社会を実現する。

現状、そして今後の趨勢を考えた時、次のような課題が浮き彫りになる。

地域住民の高齢化 ネットゼロに向けた取組みの課題 耕作放棄地の増加

食料廃棄物から排出される CO₂ エネルギー自給率減少 人口減少

これらを考慮して、これまで以上に効率的な働き方が求められる。

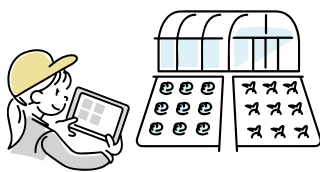
解決策として、ヒトやモノの「シェアリング」に着目する。



02

取組み・アイデア

資源



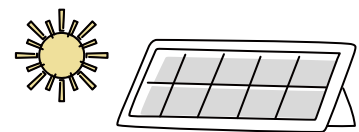
「資源」の観点では、南足柄市で耕作放棄地となっている土地を農地として復活させ、ICTを取り入れることで農業に取り組みやすくなるよう工夫する。

人



「人」の観点では、農業に関心のある移住者の呼び込みや、高齢者のセカンドライフとして農業を楽しんでもらう。環境教育や食育の機会を提供する場としても活用する。

脱炭素



「脱炭素」の観点では、農地にソーラーパネルを設置して発電し、そのエネルギーを地域内で売買するソーラーシェアリングを行う。

これらの取組みを通じて、シェアリングを中心とした循環型の街づくりを行う。また、今回の南足柄市はシェアリングの実証地域として運営し、今後様々な自治体に展開していくことも想定している。

魅力 × 未力 ～脱炭素のまちづくり～

大学生3名、企業社員2名、自治体職員1名

01

2050年のあるべき姿と課題

脱炭素を通じて「まちの魅力 × 未力」が高まる「まちづくり」を実現する。

「魅力」＝まちに住む市民 × 「未力」＝行政や企業の力で将来の取組みから変えていくこと

行政

今後のあらゆる施策に脱炭素の要素が含まれることを理想とする。隣接する自治体の連携が進むことを想定する。

住民

よりよく暮らし、住みたいまちとして選んでもらえること、また、住民に脱炭素のイメージを持ってもらうことを理想とする。

企業

開成町は県内でも人口増加率が1位であり、企業流入が増えたことで発展している側面がある。このように、特に脱炭素の意識を持った企業に多く参入してもらい、パイロット地区として積極的に実践してもらうことを理想とする。

02

取組み・アイデア

行政の取組み



ゼロカーボンシティの実現に向けた5市・町の連携を強化する。EV車の導入の取組みを加速化。また、建設予定の新たなゴミ処理場では、ゴミ処理時の廃熱利用やバイオマス発電などに取り組む。

住民の生活



新築住宅への再エネ導入支援などを進めつつ、住民に脱炭素への意識を高めてもらう。徒歩や自転車利用を増やす。そのために重要なのはシビックプライドの醸成であり、住民が居住地域への誇りを持ち、まちのために脱炭素に取り組もうという気持ちを後押しする。

企業の二次交通への取組み



複数の公共交通機関が運営されているにも関わらず、自動車利用が中心となっている現状を変えるため、EVのカーシェアリングのほか、川・公園・企業の保有地などの開放を通じて「回遊できるまちづくり」を進める。

食 めぐる・つながる・コミュニティファーム

企業社員2名、自治体職員2名、NPO関係者2名、研究機関1名、大学生1名

01

2050年のあるべき姿と課題

脱炭素アクションと人の幸せの向上を両立させた無駄のない社会
生活するうえで必要最低限なものを調達できるコモンのある社会を実現させる。

お金を払い、モノを消費することで幸せを得るのではなく、当たり前な幸せを日々感じるこ
が出来るとなようなまちづくり

このビジョンに向け、地球温暖化抑止においてインパクトの大きい下記を課題として設定。

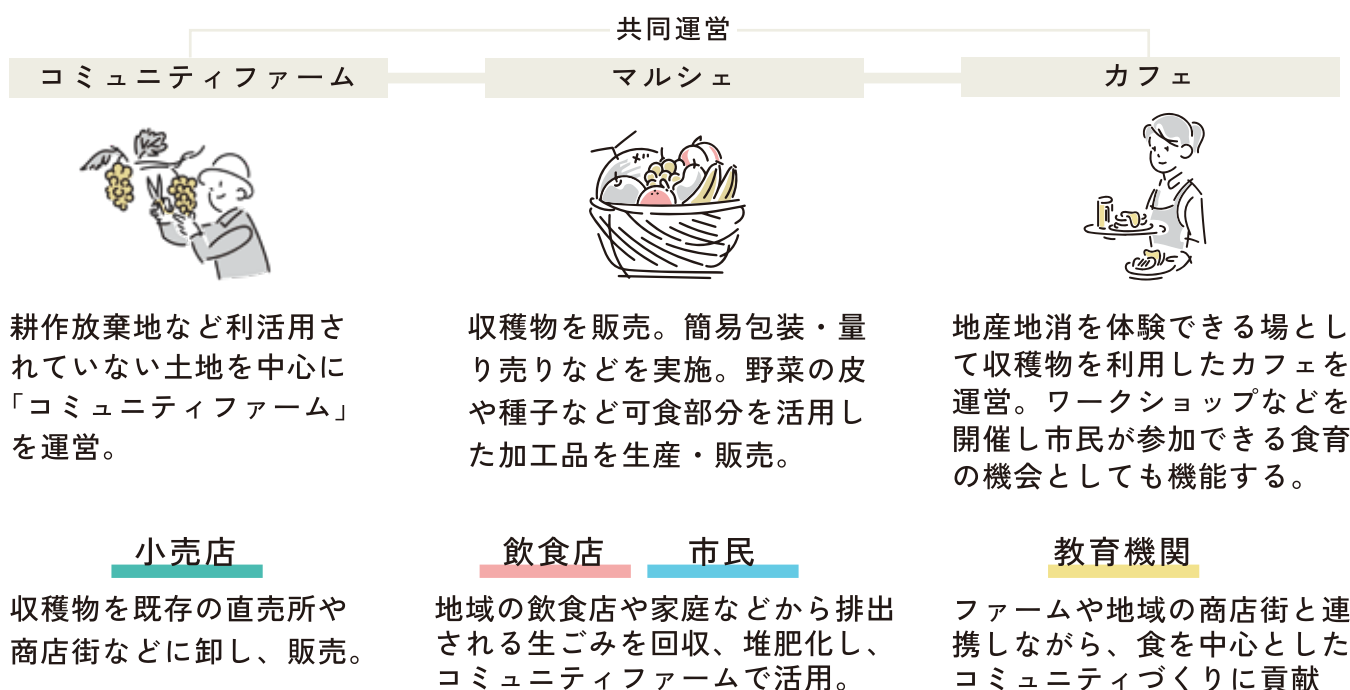
食糧廃棄の削減 **食品の流通に伴う包装資源／炭素排出量の削減**

食糧廃棄問題が加速してしまった原因の一つに「生産から廃棄までの背景の不可視化」がある
と仮定し、顔の見える生産を体験できる開かれた場としての「**コミュニティファーム**」の運営
を提案する。

「コミュニティファーム」は市民同士の交流やつながり醸成の場となるほか、生産した食材を
販売／活用するマルシェやカフェなどを周辺で運営し、地産地消を実践する小規模の循環型地
域社会モデルの実現を目指す。

02

取組み・アイデア



参加する市民にとって地産地消や環境問題などに触れるきっかけとなり、実際に協働・体験すること
で問題解決に貢献している実感が得られ、循環型地域モデルの実現に主体的に取り組む機会となる。

グループ 4

THEME

まちと自然 ブルーカーボンで観光できるまち 深呼吸できるまち

MEMBER

NPO 関係者 2 名、企業社員 1 名、自治体職員 1 名

01 2050 年のあるべき姿と課題

ブルーカーボンで水中観光できるまち

観光地の良さも残しながら自然とふれあい、自然教育を伸ばした状態を目指す

深呼吸できるまち

横浜・みなとみらいという都市で暮らしながらも、自然の存在を感じられる状態を目指す

「**自然との共生**」を重要な価値観として将来像を描くにあたり、下記の課題がある。自然は管理コストがあるからと忌避されやすく、**経済的には評価されず軽視されやすい**みなとみらいの海に対するイメージとして「**生物多様性が想像しにくい**」

横浜市みなとみらい地区のポテンシャルは「海」にある。同市ではすでにブルーカーボンの取組みが行われており、それが強みである。

02 取組み・アイデア

ブルーカーボンで水中観光できるまち



2050 年を目指し 2027 年にアクションが軌道にのることが目標。みなとみらいの海で、マイクロプラスチックの現状を体感できるボートツアーを実施する。

市が進める「ブルーカーボン計画」に、より多くの人に参加してもらおうことを目指す。

市によっては、高校生や大学生などを対象としたワークショップの開催を通じて「多様なステークホルダーを含むプラットフォーム」をつくる。

ワークショップをもとに「CO₂をとめる」という意識を生みながら、市民と行政のコミュニケーションを醸成し、市に声が届きやすいようにする。

「ブルーカーボン計画」については、小学校の教育現場でも扱われているが、藻場を育てて魚を増やそうとしても気候危機が加速すれば海藻が減ってしまうという課題がある。これらを踏まえ、近隣の小学校・大学、計画に関心を示している企業を巻き込んで取組みを進める。

深呼吸できるまち



2050 年までに「深呼吸できるまち」を目指して緑化条例を制定。

大阪の梅田スカイビル下にある人工の森をイメージし、このようなまちづくりを横浜でも実施。

みなとみらいの景観条例では、基調カラーが「グレー」とされているが、これを「緑」に変えることでも、緑の多いまちづくりにつながるのではないかな。

交通 葉山町シェアライドサービス

企業社員4名、大学生3名、自治体職員1名

01

2050年のあるべき姿と課題

全域で脱炭素シェアモビリティが普及、ウォークラブルな都市構造、負荷なく行きたい時に行きたいところに行ける社会

シェア文化の浸透、過剰な車の生産・所有の抑制、環境負荷の低減

一極集中ではなく、中小規模分散的かつ独自性のある地域発展

都市部から地方への移住が増加。各地域が適正な人口密度となり、「地域間格差」や都市での「渋滞・満員電車」が解消

地域では人と人の連携、体験、主体的活動が生まれ、動いている

実現のために取り組むべき課題

移動において排出されるCO₂ 過剰な車の台数 ラストワンマイルの交通手段がない
 次世代モビリティが普及していない（コスト/アクセス面） 買い物難民の高齢者
 車や電動自転車がないと移動に困るが保有したくない 脱炭素モビリティを買えない/周りにない

02

取組み・アイデア

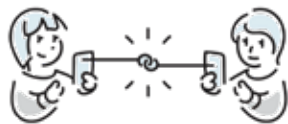
ローカルなライドシェアサービス

地域住民の乗り合いを可能にするプラットフォームを構築、「乗りたい人」と「乗せたい人」をマッチング。個人の自動車利用の減少、EVを積極的に取り入れ普及に貢献

サービス導入・利用の流れ



乗り合いマッチングのプラットフォームをサービス開発者が構築



乗せる人は、行き先・予定日時、乗る人は、行きたい場所・日時を投稿し、マッチング



プラットフォームはオンライン上の掲示板を想定。その利用が難しい高齢者などは、町役場や団体がサポート



乗せる人に対して安全性を考慮し、認定制度を設ける

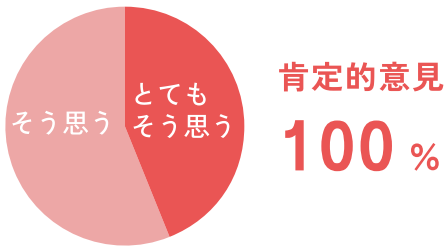
ライドシェア利用者へのインセンティブとして、地域通貨（トークン）などを付与。この際、ガソリン車よりもEVに高インセンティブを与える

この取組みにより、移動における脱炭素化推進（車数の削減、EV化促進）、移動の利便性向上や、ライドシェア文化の普及、地域コミュニティの醸成などが期待できる

評価・振り返り

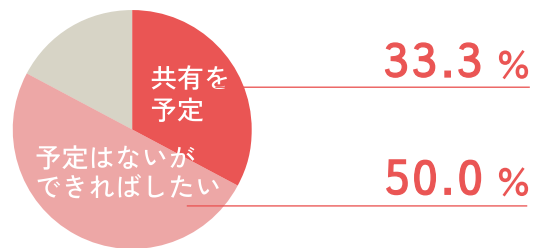
参加者終了後アンケート結果 (18名回答、うち1回目のみ参加3名、2回目のみ参加1名)

Q このワークショップに参加してよかったか



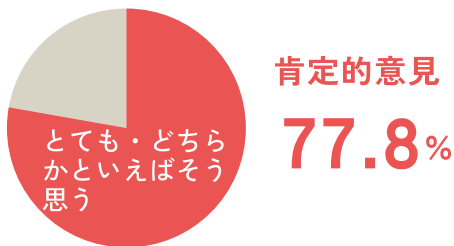
A

Q 今回の結果を職場等で共有することを考えているか



A

Q 今回のワークショップを、職場等の業務に生かすことができるか



A

Q その他の質問 (積極的な回答の%)

A

- ・基調講演の内容はわかりやすかったか **94%**
- ・4つの情報提供の内容はわかりやすかったか . . . **100%**
- ・グループワークでは参加者同士で目標に向かって議論を深め、アイデアを出すことができたか . . . **72%**
- ・グループワークでは、専門家の助言が活かされていたか **61%**
- ・発表では、それぞれが納得する結論に達することができたか **75%**

参加者の声 今回のワークショップに参加して自分が変わった、影響を受けたと思うこと

学びや発見があり、繋がりもできる機会となり、非常に満足しています。貴重な機会をつくっていただいた皆さんに感謝しております。

行政、企業、NGO、大学生、市民の方を交えた若い世代と関わることで、普段置かれている環境では発想のない考えに触れることができ、刺激を受けました。

参加者の皆さんや運営の皆さんのモチベーションや課題意識なども詳しく伺える機会がありましたら幸いです。

より専門的な意見を持った企業やサービス提供をしているベンチャー企業などがいっても面白いと思った。

自治体や他団体の方と一緒に討議・企画することで、異なる立場や活動を通じた情報や発想が見つかり、協働的にサステナブルなプロジェクトをつくっていく感覚や可能性を2日間だけ疑似体験できました。日々、あのように産官学民等が交わりつつ、検討と実行を進めていけるスキームをつくりたいと感じました。

・・・社会人の人と意見交換できたのはいい経験になったと思う。印象的だったのは、環境問題に取り組むにあたって、企業側のメリット、消費者側のメリットの双方が成り立たないと環境問題の解決策になるのは難しいんだろうなあという話の展開だったことだ。

県西にもポテンシャルがあることを知ることで、神奈川県での脱炭素計画に希望を持てた。また、自治体職員の方がフレンドリーに会話をしてくださったので、ユースに寄り添った姿勢が見え、自分のやる気に繋がった。

初めから、ワーキングのグループ分けをしておいても良いような気もした。



フォローアップ 3 か月後ヒアリング 【4名(企業関係者3名・NPO経験者1名)】

Q ワークショップ後の変化

- ・シェアサイクルを試したり、身近な交通事情を調査。
- ・参加後もグループメンバーから脱炭素イベントが案内されるなど、個人的にも交流。
- ・事例資料を職場内で展開し、県の取組みなどを改めて説明した。
- ・社内でCO₂削減ポイントラリーを導入し、コンテスト。ワークショップで得た情報も実施項目に活用。
- ・本プログラムは、他の若者ワークショップの開催に参考となった。
- ・社外との協働は思っていたより難しい面があり、時間がかかることがわかった。
- ・地域の特性と脱炭素アクションとの結びつきが重要だということを再認識。

A

Q これから取り組んでみたいこと

- ・暮らしの中から気軽に問題を話す、知る、学べる場所、コミュニティづくりローカル・アカデミーで環境問題の啓発や企画を実践。地域でソーラーシェアリングも実践。市民が発電所を立ち上げるノウハウを公開し、出資もボトムアップで立ち上げる取組みを作っていく。
- ・地域で面白い、先進的な取組みをつないで、県西部全体をサステナブル実験都市にしたい。都市部にいる人たちが自然に近いところで学びを得たり、つながりの中でいろいろ実験していく週末人口作りのようなことをしたい。
- ・会社としてもICTやデジタル技術をバックグラウンドにしているので、それと脱炭素でつながるものを一緒に作っていきましょうという働きかけをしている。
- ・自然災害防止の観点からも脱炭素は保険会社として取り組む意義がある。安全運転の保険料割引にエコドライブを指標に入れるなど。社会貢献とビジネスの両軸で取り組んでいる。
- ・地域特性を生かしたまちづくりなど、地域の人の結びつきを生み、脱炭素だけでなく地域のレジリエンスを高めるような取組みをしていきたい。「食」を中心に、学校・商店街との連携、マルシェ・カフェの運営、地産地消、地域菜園での関係の構築など。夢がある。実現したい。

A

Q ワークショップの感想・改善点

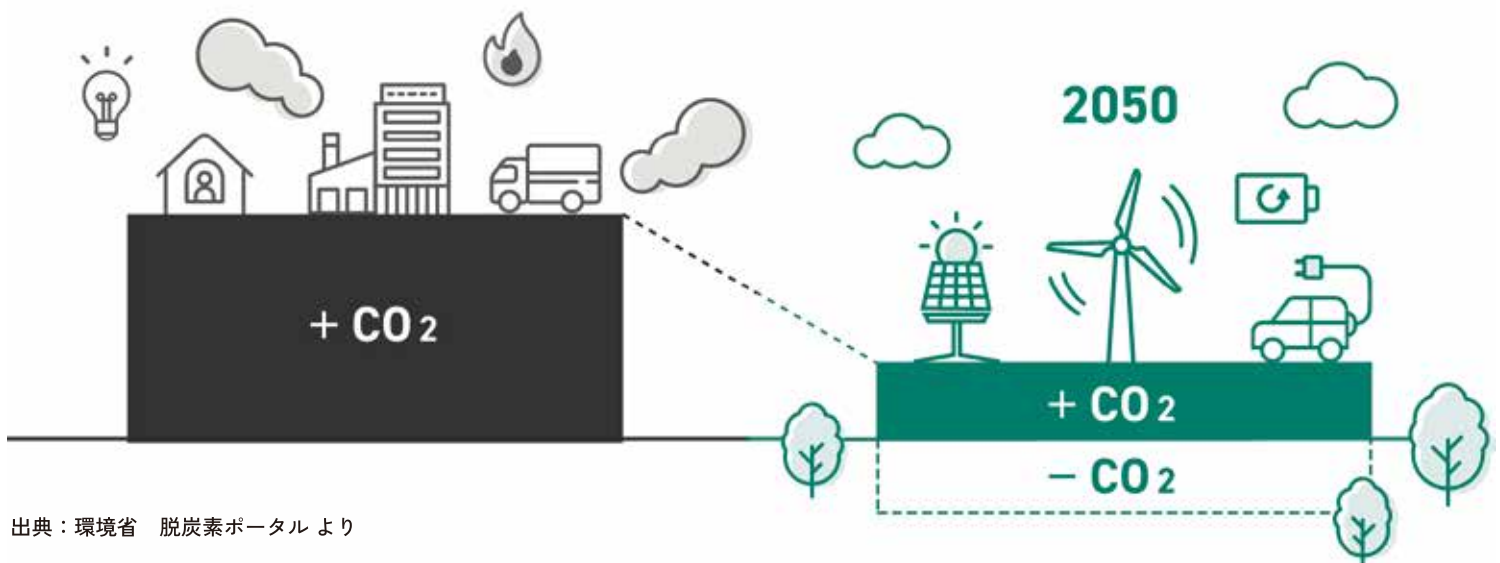
- ・もう少し話を掘り下げたかった。
- ・もっと時間をかけるやり方で。継続的に実施、日数を増やす、合宿にするなど。
- ・2回目の準備に、連絡先を交換できない方もいてハードルになった。
- ・ワークショップの成果の提案を具体化・事業化に進める支援があると、よりモチベーションが高まる。
- ・参加者の関心分野等をあらかじめ把握して、事前にグループ分けしておくといよい。
- ・情報提供を脱炭素アクションのアイデア作りにつなげるため、論点整理しておくべき。
- ・今回は、交流、アイデア出し、報告などいろいろ活動があったが、焦点を絞ったらどうか。

A

考察

- ・ワークショップは、全体的に参加者から積極的な評価を得られた。ワークショップの体験・内容は、その後の日常生活や業務、今後取り組みたい課題の明確化にも活かされている。事例学習や共同のワークから、脱炭素社会づくりに向けた分野を越えた協働の重要性が共有され、その実現の難しさ、課題の大きさも実感されたと思われる。
- ・ワークショップの課題として、
 - ①グループワーク充実のためのワークショップ回数の検討、ワークショップで焦点を当てるテーマを事前に決め主催者・参加者・外部講師が十分な準備で臨める実施計画
 - ②ワークショップで提案された有望な協働のプロジェクトが実現に向けて動き出せるような支援体制
 - ③ワークショップへの参加を通して若い世代が参加者同士や組織・グループ、地域社会とつながり、脱炭素の協働の担い手として活躍できる仕組みづくりが求められる。

今回の評価・課題をふまえた上で、脱炭素次世代ワークショップの取組みの各地での実施が期待される。



出典：環境省 脱炭素ポータル より

発行 神奈川県環境農政局脱炭素戦略本部室

「かながわ脱炭素次世代ワークショップ」事務局

一般社団法人 環境政策対話研究所 〒215-0021 川崎市麻生区上麻生 3-12-11 エスケーハイツ 103

tel: 044-387-0116 email: office@inst-dep.com

デザイン 田邊未希